

図書紹介

Bohmu Bashin. *Pagan Hminzazu Thudethana Longan*. Myanma Naingan Thamain Kawmashin. Rangoon: 1964. x+143 p. [バシン少佐編: パガンの墨文調査報告。ビルマ革命政府文化省ビルマ史委員会] (ビルマ文)

ビルマ史および古代ビルマ語の研究者にとって最も利用価値の高い資料は、約3千にのぼる石碑 (Steinschrift) であるが、その補助資料ともいべきものに、素焼の土板 (Votive Tablet) と仏塔や僧院の壁に書かれた墨文 (Ink Inscription) とがある。

石碑については、かつて600余の facsimiles を収録した *Inscriptions of Burma* (1933-56) が公刊されており、また Pe Maung Tin & G.H. Luce による現代ビルマ文字への転写文(1928年)や、E Maung による転写文(1958年)等があった。また、土板についても既に U. Mya による写真版(1961年)が公にされている。しかし、墨文に関するまとまった調査報告書は従来なかった。おそらく本書がはじめてであろう。

石碑や土板が、石または粘土を材料としてそれに文字を「彫り込んでいる」のに対し、墨文は、仏塔や僧院内部の壁画の下に墨で文字を「書いた」ものである。時代的には、仏塔、僧院の建立当時に書かれたものと、後世それらを修理した際に書かれた墨文の二種に分かれる。内容は、個人の生年月日を占星図に配置した形式のものが圧倒的に多いが、散文、韻文形式による功德の記念銘文や偈頌等もみられる。

本書は、1955年に設置されたビルマ史委員会 (Burma Historical Commission) が中心となって、1962年2月から翌年3月までの間に行なった古都パガンの墨文調査報告である。全体の構成は、第1次から第3次までの調査活動 (第1次1962年2~3月、第2次同年10月、第3次同年12月~1963年3月) をまとめた本文と、(1)墨文、(2)建築様式、(3)壁画の3部に分かれた Appendix、並びに、墨文18枚、壁画15枚の写真および地図とから成り立っている。

墨文は、単にビルマ語史の研究資料としてだけではなく、パガン時代、インワ時代におけるビルマ人の生

活状態、社会、経済、美術、仏教等の一端をうかがい知るための重要な史的資料でもある。革命政府が絶えず力を入れてきた民族文化遺産の保存と調査研究の成果がまた一つまとまったといえよう。ビルマにおける学問的水準の高さを示す例という意味からも、本書の一読をおすすめしたい。(大野 徹)

Eugénie J.A. Henderson. *Tiddim Chin, A Descriptive Analysis of Two Texts*. London: Oxford University Press, 1965. ix+172 p.

本書は、東洋アフリカ学院 (ロンドン大学) で音声学の教授をしている著者が、1954年の秋、Theodore Stern, G.H. Luce 等と共に、4週間にわたって行なったチン丘陵のクキ・チン諸語調査の研究成果の一端である。

インドとビルマの国境に沿って南北にのびるチン丘陵地帯 (行政的呼称はチン特別区) で、クキ・チン語とよばれる数多くの方言から成り立つ言語が話されている事は、かなり古くから知られていた。G.A. Grierson 以降使用されている分類法 (北部チン、中部チン、南部チン、古クキの4方言群) を踏襲すれば、本書の分析対象であるティディム方言は、「北部方言」に属する。古くは Kamhau とも、Sokte ともよばれたが、今日では一般に Tiddim と称されている。

著者は、ティディム方言による二つの物語を材料として、Narrative Style と Colloquial Style の分析を本書で行なった。前者はいわゆる「文語体」であり、後者は「口語体」を意味する。この二大文体に基づき、著者はティディム方言の構成要素として、音韻、声調、音節、文、句、Figure (語と接辞の連結形)、語、接辞等を明らかにしている。但し、文、句には、書かれぬ要素として Intonation が含まれる。

ティディム方言の言語構造がきわめて精密に分析記述されている点、確かに本書は、典型的な Descriptive Analysis の本である。けれども、ティディム方言の文法構造すべてが、本書の中に網羅されているわけではない。そしてその原因が、材料の乏しさによるものである事も否定できない。資料として用いられた二種の物語の一つ Dahpa Thu は、ティディム・チン族の間では広く知られた伝説であり、拙稿「共通クキ・チン語の再構成」(『言語研究』No. 47, p. 9)